1999年 10月1日 発 行

ハイマート Heimat

ぐんま日独協会会報

20 今年は ドイツに於ける 日本年

発行者 平形義人
発行所 ぐんま日独協会
〒377-0007
渋川市石原966 母心堂 平形眼科方
☎0279-22-0149 FAX 0279-24-6867

花井 清　織田 正雄　高崎 駅長　井上 晃良　平形 義人　カール・ケラー　トミイ夫人　木暮 沢子　伊藤 廉平　福田夫人　阿久沢 達子　清水 教子　福田・博行　黒田 とめ子　久保田 長吉　井上 敏子（敬称略）

上越新幹線Max311 高崎駅頭の歓迎（敬称略） 1999.4.15

■ハイマート20号の主な内容■

第12回ぐんま日独協会総会報告……2～3
ベルツ博士と草津・伊香保……4
ドイツ訪問記……5
日独エコデザインセミナーに参加して他……6
中村鉱一会長勇退、津軽三味線と出会って……7
会員からのお便り、催し物のご案内……8

お知らせ

ぐんま日独・クリスマスの集い

日　時　'99. 12. 5（日）　PM 1：00～4：30
場　所　前橋市　群馬会館（地下食堂）
会　費　2千円　交換プレゼント（千円相当）
特別出演　津軽三味線日本一
（PM1:00～2:00）石 川　一（対馬副会長甥）
申込み締切り　11月23日（同封振替用紙にて申込）
5分内スピーチ　希望者は受付まで

題字：平形義人　表紙写真：岩森裕子

エルウィン・フォン・ベルツ博士の生誕150年記念ぐんま日独協会総会開催

★当ページの原稿はすべて日独協会(全国紙)より転載致しました★

さる４月15日(木)、第12回ぐんま日独協会(平形義人会長)総会行事が、以下のような多彩なプログラムの下に盛大かつ有意義に開催された。場所：於　高崎駅メトロポリタンホテル６Ｆ。プログラムは、①ぐんま日独協会春の昼食会、②第12回年次総会、③ベルツ博士生誕150年記念公開講演、④マイカーによる上州散策－「少林山達磨寺」「洗心亭」(ブルーノ・タウト事跡)、⑤ぐんま日独の夕べ、於伊香保温泉　ホテル金太夫。

今回の催しを開催するにあたっては、平形会長の陣頭指揮の下、役員皆様の綿密な計画、準備など多大なるご尽力、そして関係機関の方々のご協力のおかげで盛会を極めた。

当日は幸いにもすばらしい天候に恵まれた。ドイツ大使館よりエルベ大使の代理として、ケーラー文化部長及び富井大使館員のご臨席をいただいた。更に(財)日独協会織田常務理事、花井常務理事、河村理事、福田評議員、同令夫人、久保田事務局長のご出席をいただいた。東京からのご一行を平形会長他会員10名ほどで日独両国旗を手に、駅長と新幹線ホームにお出迎えした。ケーラー文化部長は初めての高崎訪問であったが、この親善に大変好感を持たれたご様子であった。昼食会では佐藤進一副会長の司会で平形会長のご挨拶、県庁国際課長、県公安委員長、経済界等、来賓の方々、ケーラー文化部長よりぐんま日独協会へ温かいメッセージを頂戴した。昼食後のハイライトとして、東京からの来賓の方々を中心に14名で高崎市長を表敬訪問、松浦幸雄市長は市長選を４月25日(日)に控えて大変お忙しい身であられたが、新庁舎の21階の貴賓室で中村助役を伴い一行に歓迎の意を表された。ケーラー文化部長より松浦市長に選挙でのご当選を心よりお祈りしますと述べられた。友好ムードが漂う中、限られた45分のスケジュールの中、最後にエレベーターホールの近くで、花井常務理事の音頭で、市長を囲んで関東一本締め。第12回年次総会後、14時より15時30分にわたり、日本温泉協会会長、ぐんま日独協会副会長　医学博士　木暮金太夫先生の「Ｅ．v.ベルツ博士と伊香保」、草津ベルツ協会副会長　沖津弘良先生の「Ｅ.v.ベルツ博士と草津」、と題して講演と貴重なスライドの投影があった。伊香保温泉・草津温泉のベルツ博士とのかかわりと温泉療法の国内外への紹介の功績がたたえられた。講演終了後、希望者によるマイカーでの少林山達磨寺を訪問。当寺は縁起ダルマの寺として大変有名である。更に有名なのはドイツの建築家ブルーノ・タウトが1934年８月から２年３ヶ月滞在した「洗心亭」がある。ここからの景色の一望は素晴らしいの一語であり、タウトの往時を偲ぶことができた。当寺の広瀬住職が院内をご親切に色々ご案内下された。この後一行がぐんま日独の夕べの会場、伊香保温泉、ホテル金太夫へ。参加者は終始なごやかな雰囲気の中、温泉医学の恩人ベルツ博士の生誕150年記念を大いに祝った。平形会長が余興として宝生流仕舞「羽衣」を舞い、一噌流の能管を並木睦枝さんが披露された。

挨拶するドイツ大使館Koehler文化部長

翌早朝ブルーノ・タウトも試みた朝食前の散歩に榛名99渓の南端に懸る船尾滝(76米)へドライブを試み、水沢観音の鐘をついて日独親善交流を祈って解散した。

(高崎市　元ＪＧ委員　井上敏子)

Am 15. April veranstaltete die JDG Gunma die Jahrestagung anläßlich des 150. Geburtstages von Prof. Dr. Erwin von Bälz (1849-1913) im Metropolitan Hotel am Hbf. Takasaki.
Herr Karl A. Koehler im Auftrag des Deutschen Botschafters gratulierte zu den erfolgreichen Aktivitäen der Gesellschaft.
Herr Dr. med. Kindayu Kogure. Präsident Japan SPA Association hielt einen Vortrag über "Dr.E.v.Balz und Ikaho SPA" und Herr Hiroyoshi Okitsu, Vizepräsident der Bälz Gesellschaft in Kusatsu, sprach über "Dr. E.v. Bälz und Kusatsu SPA".
Herr Koehler und die Teilnehmer aus Tokyo statten dem Oberbürgermeister der Stadt Takasaki, Herrn Yukio Matsuura im Rathaus einen Höflichkeitsbesuch ab.

Die Brücke 編集後記より

■去る４月15日、我々、東京の日独協会有志（花井、織田、河村、久保田の諸氏と小生）は、ぐんま日独協会総会に参加させていただいたが、総会の詳細については、"Die Br cke" ５月号所載・高崎市在住の井上敏子会員の御寄稿文で御読みいただいたことと思う。

ぐんま日独協会の平形義人会長以下同会員の皆様方の心あたたまる、且つ、行きとどいたおもてなしには唯々感謝申し上げるのみであるが、その際、木暮金太夫氏と沖津弘良氏のベルツにまつわるお話は感銘深く拝聴、帰京後早速「ベルツの日記」等を繙いているところである。又、御案内いただいた少林山達磨寺の「洗心亭」では昭和の初め２年余滞在したブルーノ・タウトを偲んだので、タウトの諸著作も、もう一度繙きたいと思っている。同じ読書をするにも、こうして、ゆかりの地を訪ねてからの読書は、又一味違ったものを感ずる次第である。

福田博行(財)日独協会評議員

■ぐんま日独協会

本の紹介（Vorstellung eines Buchs）
朝雲久兒臣著　「もうひとりのブルーノ・タウト
　　－文明批評家論の創造的提言」
お問合せ：〒390-0813　松本市埋橋2-122-22
　　中島丘大方
　　Tel. Fax：0263-36-0567
定　　価：3,500円（送料別）

■事務所移転（Umzug des Buros）

新住所：〒377-0007
　　渋川市石原966 平形眼科気付
　　Tel.　0279-22-0149
　　Fax.　0279-24-6867（1999年６月１日より）

Tokyo. 22. April 1999

Herrn
Yoshito Hirakata
Praside nt der Japanisch-Deutschen
Gesellschaft in Gunma

Sehr geehrter, lieber Herr Praside nt,
ich möchte Ihnen und den Mitgliedern der Japanisch-Deutschen Gesellschaft in meinem eigenen Namen und im Namen von Frau Tomii ganz herzlich für Ihre große Gastfreundschaft bei unserem Besuch bei Ihnen danken. Dieser Tag und das Treffen mit so vielen interessanten Persönlich-Keiten, sowohl in der Gesellschaft als auch der Stadt Takasaki wird uns immer in bester
Erinnerung bleiben. Besonders das anregende und amüsante Gespräch mit dem Bürgermeister, der sich als erfolgreicher Bäcker zu erkennen gab, hat uns interessante Einblicke in das japanische Leben vermittelt.
Ich möchte Ihnen hiermit zu einer sehr gelungenen Hauptversammlnug anläßlich das 12.
Jahrestages der Gründung Ihrer Gesellschaft gratulieren. Ich habe hierüber den Herrn Botschafter und meine Kollegen gleich am nächsten Tag informiert und auch auf die besondere Bedeutung von Erwin von Bälz für Gunma hingewiesen. Es ist schon, wie die lange kulturelle Tradition unsere beiden Länder verbindet.

Mit besten Grüßen verbleibe ich
Ihr

Karl Köhler
Leiter des Kulturreferates

(訳文)

ぐんま日独協会
会長　平形　義人　様

東京、1999年４月22日

拝啓

先般、貴協会を訪問致しました際には、大変ご歓待頂き、同行致しました富井ともども、ここに心より御礼申し上げます。貴協会を訪問した日と貴協会や高崎市から非常に多くの個性的な方々と知り合いましたことは、私ども二人にとり大変良い思い出として残るものであります。とりわけ、パンを焼くことで大変成功を収めておられることが推察される市長との会談は刺激的で楽しく、私どもに日本の生活の興味深い面を垣間見せてくれました。

この度の貴協会第12回総会は大きな成功を収められ、ここにお祝い申し上げます。この件は、翌日すぐに大使や同僚に報告し、また群馬にとりエルビン・フォン・ベルツが特別な重要性を持つものであることを話しました。日独両国をこのような長い文化的伝統が結び付けていることは素晴らしいことであります。

敬具

ドイツ連邦共和国大使館
文化部長
カール　A　ケーラー
（署名）

高崎少林山にて

ベルツ菩提寺西明寺ご住職と共に

昼食会―高崎メトロポリタン

高崎市役所―松浦市長と共に

ベルツ博士が草津に残された地域因子

草津　沖　津　弘　良
（草津ベルツ協会副会長）

草津町は2000年７月、町政施行100年を迎えます。その記念事業の一つとして、町のシンボポル湯畑の石柵に、古来より草津を訪れた多くの旅人の中より、著名な方のお名前を刻み込み、後世に伝えることにした。余りに多くの文人墨客の数に、その選択も困難致しました。又、それらの人達を招いた草津温泉に今更ながら驚嘆を感ぜずには居られませんでした。多くの旅人が草津滞在中に残された俳句や短歌、文学作品の他にも、様々な物を残しました。中でも、明治11年より、幾度となく好んで草津を訪れたベルツ博士に示唆を受けた、私たちの祖父や曾祖父は大正末期に草軽電鉄を完成させ、昭和23年冬、町民総力で日本で最初のスキーリフトを完成し、近くは草津夏季国際音楽アカデミーを遂行させる等の事業に取り組んできました。

草津生まれの私にとり、ベルツ博士の名前は子供心に何時しか頭に刻み込まれておりましたが、そのベルツ博士が日記の中で「草津には無比の温泉以外に、日本で最上の山の空気と、全く理想的な飲料水がある。若しこんな土地がヨーロッパにあったとしたら、カルルスバードよりも賑わうことだろう。」と記しました。そのチェコ共和国のカルルスバードで、今年の５月１日に、ミュンヘン在住の一日本女性の悲願であった庭園が築園されました。ベルツ博士の生誕150年を記念して開園式が行われ、「生涯で一番の幸せは、“花”に巡り合ったことである」とベルツ博士は最愛の妻花子を評し、庭園は「花・ベルツ庭園」と名付けられ、その枯山水の庭園は、見事にボヘミアの地に溶け込んで居りました。

チェコ・ドイツ・日本と三ヵ国の国際交流の大きな懸け橋が又一つ増えたことに成りました。ベルツ博士が、先人たちに残された地域因子が我々に伝えられ、又、遺徳を後世に語り伝える事業として「ベルツ記念館」の建設を進めて居る事を申し添えます。

ベルツ博士と伊香保温泉と博士東大在職25年祝賀会

日本温泉協会会長
ぐんま日独協会副会長　木暮金太夫

ベルツ博士と伊香保温泉の関係は明治11年(1878)頃からであり、明治13年(1880)に出版された日本鉱泉論にくわしく伊香保温泉の改良点が記述されている。この日本鉱泉論は博士来日後最初のわが国の温泉に関する著述であり日本の温泉療養地学の原典となった。数多い日本の温泉地のなかで伊香保が最初にとりあげられ系統的指導を受けたことは伊香保温泉の誇りである。明治13年来香時の宿舎は楽山館木暮八郎方であった。ベルツと花との結婚については花の著書「欧洲大戦当時之獨逸」にベルツがありし日の思い出なる章があり、伊香保に関する次のような記述がある。「明治12年、13年頃から日本に参って居た西洋人達の間に上州伊香保の温泉に行く事が流行しました。宅のベルツも14年に今日の千明の下の處に別荘風な簡易な住居を建てまして友人と三人連で出掛け大満悦で居りました。15年にも友達二組にて出掛けたので、面白く夏季を過ごすことが出来ました。」このようにベルツと花は明治14、15年の二夏伊香保の別荘に滞在し温泉研究や伊香保の指導をおこなっている。結婚の年、明治14年はベルツ32歳、花18歳であり、したがって伊香保はベルツ夫妻にとって新婚旅行の地であり、二人にとって生涯忘れることのできない土地となったのである。伊香保は博士の指導によって温泉改良取締所、浴医局の開設、わが国第一号ともいうべきクアパーク(八千代公園)の建設など温泉療養地として必要な改良が他の温泉地に先がけて進んだ。ベルツの別荘については明治22年(1889)まで所有していたという花夫人の記述とその他の資料から別荘は明治24年(1891)旧ハワイ王国駐日代理公使、アルウィン別荘として引き継がれたものと思われる。また昭和61年(1986)には源泉地に来香当時の若き日のベルツの胸像を建立する等、伊香保の恩人であるベルツ博士を顕彰している。

平成11年(1999)はベルツ生誕150年、来日123年に当る。この記念すべき年に奇しくもベルツ教師在職25年祝賀会報告(原本)を入手した。今迄でにこの25年祝賀会については多くのベルツ関係図書において紹介されているが、過ちもあり必ずしも正確でないのでここで生誕150年を記念する意味でこの報告の主な内容を紹介し正しておこう。

知友、同僚、門弟相謀り祝賀の意を表する目的で明治33年(1900)４月、東京に於いて発起会を開催し次の事項を決議した。一、ベルツ氏の肖像を鑄出した金牌及此の挙を賛成せる人々の写真を入れた写真帖を同氏に贈呈すること　一、明治34年11月を期して祝賀会を東京で開催すること。一、醵金高は一人壱円以上として33年９月30日限りで送致すること、一、緒方正規氏を委員長に青山胤通、三浦謹之助、入澤達吉、高田耕安、橋本節斉の五氏を委員に推挙して一切の計画を委托し、金員の出納を清水彦五郎氏に委嘱すること、明治33年末に彫塑家、長沼守敬、鑄金工、鈴木長吉両氏に金牌製作依頼。

製作せるベルツ氏肖像入金牌　直径8.7㎝、(このメタルの写真紹介ははじめて)

製作せる写真帖は江木写真店装釘四冊、醵金者448名の顔写真入り

醵金者　448名、　醵金収入合計　1188円、

祝賀会

日時　明治34年11月22日　出席者　270餘名ほかに東京、横浜居住外人20餘名

会場　小石川植物園

式典　午後三時　委員長　緒方正規氏よりベルツ氏に金牌及び写真帖贈呈

緒方　正規氏　獨文祝辞

高橋順太郎氏　獨逸語で演説

笠原　光興氏　京都医科大学を代表して祝詞

菊地大麓文部大臣　祝辞

ベルツ氏答辞　科学では成果の追求だけでなくその本質と精神を知らなければならない。

祝宴　駐日獨逸公使　アルユ・ワルレイ閣下演説

以上が祝賀会の概要であるが、醵金者のうちは青山胤通、三浦謹之助、入澤達吉、森林太郎、北里柴三郎など錚錚たる大先生が名を連ねている。群馬県関係では産婦人科の櫻井郁次郎の名がみえる。またこのなかに太田弥太郎（東大医学部明治15年卒、筆者の祖父の兄）の名をみいだしたときは驚き感激した次第である。太田弥太郎は青山胤通と同級でベルツの教え子である。

東欧駈けある記

前橋市　佐　藤　進　一

去る５月渋川の高橋先生ご夫妻と旧東ドイツ及びその周辺をツァー見物して来ました。ベルリンを起点にポツダム、マイセンを訪れドレスデンへ一泊しました。昨年もベルリンへ来ましたが、アレクサンダープラッツの開発工事は大分進捗して、ベンツやソニーのビルは新鮮味ある芸術性を提示しておりました。連邦議事堂も装（よそおい）を新たに修復中でした。来年はボンから政府機関が移るので、ベルリンは正にその準備に大童でし　た。ドレスデンも５年前来た時より、街頭がきれいに整っていました。

ツァーのバスは次にプラハへ行きましたが、５年前群馬交響楽団が演奏した会場（ビート教会）も見学しました。翌日はオーストリーに入り、先づリンツへ泊まりました。此所は流石に清潔で落ち着いた街です。リンツはウィーンとザルツブルグの中間にある都市ですが、街の中をドナウ河が流れており、翌日は船でドナウ下りを楽しみました。

ウィーンではシェーンブルンを始め主な名所を巡りましたが、私にとってはベルリンと同じく５度目の訪問です。街並は以前と少しも変わらないのがウィーンらしい点です。

夜はグリンチングのレストランで民族音楽にツァーの客は大満足でした。日本ではすぐマイクを使いますが、この國ではツィターもバイオリンやソプラノも凡て生（なま）の声です。最後の都市はブダペストですが、ここでもドナウ下りをしました。河を挟んでブダとペストの夜景は仲々ロマンチックでした。次の夜はジプシー音楽の饗宴でした。かくて10日間の旅は楽しく忙しく終わりました。

ベルリンの壁記念碑として保存されている

ドレスデン宮殿の美術館

「独日青少年交流コンサート」に参加して

富　沢　和　子

日独青少年交流コンサートはニーダーザクセン州音楽コンテスト「ユーゲント・ムジツイアート」の入賞者と、音楽家を目ざす日本青少年の間で、一年に一度、会場を交互して開催されます。

昨年の12月東京会場の折、初の前橋地方公演を実現・貴独日協会会員の家族である荒木江里佳・渋川ナタリさんの出演と会員達の応援をいただき、大成功を博しました。

その感激もさめぬまま、去る５月24日、私は、ドイツでの交流コンサートに、選出された日本青少年演奏者５名（琴２人・ピアノ２人・ヴァイオリン１人）と同伴できるチャンスに恵まれた。今年のコンテスト開催地はケルン市。私達が到着した時は、ちょうど本選会の最中であった。若者達の奥底から涌き出る音。響き渡るドーム型ホール。聴衆との一体化した空間が私達を圧倒しました。

我々客席者も、絶妙なテクニックときめ細やかな表現力をもって現代曲で答えることができました。

その後、北西部各地で計11回の交流コンサートを成し、６月６日ヴッパータールで選ばれた入賞者と共にレコーディングを終え、17日間の音楽による交流の旅を果たしました。

とりわけ、ハノーファー市での７日間は隣り街である「ブラランシュヴァイク独日協会」の多大な援助を受けました。当協会は、200人の会員により、学術講演会、セミナー・コンサート・日本映画会・日本美術品展示会等の年間活動を通して、独日間の理解と信頼を深めております。我々もホームスティ先で会員家族達の友情に支えられながら、彼らの企画した各地のコンサートで熱演しました。お国自慢の面持ちで市内を案内してくれた独日協会の日本婦人達。茶道では、茶を立てるひた向きな日本女性の顔に、私は初めて日本を感じました。琴の演奏に魅せられ、琴に近づき、つまびいていたドイツ人会員達。そしてレナーテ・シャート会長さんの「ト・ミ・ザ・ワさん、ようこそ」というやさしい声は、今も私の胸の中に響いて消えません。（終）

ガイリング宅にて歓迎会
右端後の人（日独青少年音楽交流協会会長）
左端　富沢　和子

独日協会「茶道会」会場にて
右端後　富沢　和子
（ハノーファー）

日独エコデザインセミナーに参加して

井上晃良

去る5月11日に東京五反田駅近くの東京デザインセンターガレリアに於いてJIDPO(日本産業デザイン振興会)が主催する日独エコセミナーに参加した。

これはドイツの優れた工業デザイン製品を選出するiF(ハノーファー工業デザインフォーラム)と日本のそれであるグッドデザイン賞のGマークを選出するJIDPOの交流の1つとしてだけではなく、工業製品を生み出す日本のデザイナーに対してデザイナーからの積極的なアプローチによって生み出されるドイツの優れた環境に配慮された製品がどのように生み出されたものであるのかをパネラーである3名のデザインに関わるドイツ人から直接聞き、我々が学び取ろうといった主旨のセミナーである。

私個人はフリーランスのデザイナーであるが、参加者の多くは企業から派遣されたデザイナーであった。また参加者は首都圏のみならず、関西圏や遠く九州からこのセミナーに参加する為にやってきた人もいた。

これから日本でも1997年の京都で開催された地球温暖化防止会議の決議に基づいて来年以降にリサイクル法案が施行され、企業には環境的配慮の負担が重くのしかかってくる。これにより企業もなるべく早いうちに色々な側面から環境対策を施す必要が生まれ、逆に環境を武器に企業のイメージアップが計れる1つのチャンスであると捉えている企業もあると聞く。その為か当日の会場は盛況であった。

ドイツから来た彼等3人のプレゼンテーションは、私にとって予想以上に新鮮かつ刺激的であった。

1番目のパネリストであるiFの代表であるラルフ・ビーグマン氏のものはスイスのRohner AGという名もない小企業が早くから環境対策に会社を挙げて取り組み、その成果で今では企業規模こそ変化が少ないものの環境への取り組みが全世界で評価され、会社の知名度アップと売り上げの上昇という1石3鳥以上の成果を上げていることを例に挙げながら廃棄物を可能な限り出さないことや代替エネルギーの活用で化石燃料に頼る今迄の消費は美徳であるという古い考えを捨てるべきとの説明をされた。

次のパネリストは以前ドイツのデザイン事務所のアジア支社代表として長く日本に住み、その後ドイツの有数な家具メーカーWilkhahn社のデザイン部門の代表として自社内の環境対策をデザインからのアプローチとして分別回収などのシステム作りを徹底して取り組み、現在はドイツ鉄道のデザイン部門の代表者として新たな歩みを始めたフリッツ・フレンクラー氏である。彼は家具メーカーに勤めていた時の実例を挙げながらデザイナーとしてエコロジーとどう向き合って行くべきかを説いた。特に現実では不可能といわれる素材の永久リサイクルについてもデザイナーとしては常に自らが作り出す製品にはリサイクルしやすい素材、構造にして素材の循環が大切であると自らの考えを述べた。1度使用された製品が廃棄後に別の製品に生まれ変わることを「リサイクル」とは呼ばず「ダウンサイクル」と位置付け、デザイナーとしては可能な限り「ダウンサイクル」ではなく「リサイクル」できる製品を作るべきであるという氏の考え方には理想主義がデザイナーにとって非常に重要であることを印象づけたのである。

最後には旧東ドイツにあるワイマールから1919年以来のモダンデザインの源流であるバウハウス運動の伝統を受け継ぐバウハウス大学の工業デザイン学科教授のウォルフガング・ザットラー氏の発表であった。

彼は北東ドイツに新しくできた木材加工会社を例に取り上げ、地元で取れた自然素材を利用しながら伝統的工法と近代的技術の両方を使って現代のニーズに合った有害物質を含まない製品の製造と販売を行い、今はまだ数少ない東側のドイツでの収益の良い会社として今なお成長していることは、エコロジーに積極的に取り組めばこそできた成果と評価していることを我々に紹介した。

各パネリストの発表の後の質疑応答も積極的な雰囲気で行われ、最後にフレンクラー氏が自らの日本滞在で得た体験的知識から出た言葉が私にとって非常に印象に残った。

それは「日本という国と日本人は第2次世界大戦終了以前は世界でもっともエコロジカルな国であった。伝統的に人々は自然と共に生きることを望み、また、それを実行してきた民族であった。だから日本はきっとそういうすばらしい考えを持った時代に還ることができるだろう」と。

我々デザイナーが製品を供給する立場の人間として如何にユーザーの立場に立った製品作りが必要なことは言う迄もないが、これからはデザインに関わらず我々全てが地球を守る為に何かをしなければならない。

「我々が戦後経済成長と共に続いてきた美徳の概念を転換すること。それこそが今最も大切なことではないのか?」そんなことを考えながら帰路についた。

「日独青少年交流コンサート」に出演して

渋川ナタリ(群大附属小11歳ピアノ)

平成10年12月12日、新群馬会館にドイツから7人の演奏家がやってきた。ヴァイオリン、チェロ、クラリネット、ピアノで、コンクール優勝を果たした14歳から18歳までの学生だ。日本勢は私を入れて10名。少々せまい楽屋に集まった私達は、出番までの数時間を共に過ごした。英語や片言のドイツ語でお互いを紹介しあう者、音楽情報をきく芸高生、そして昼食後、静かになったと思ったら空いている個室(何とトイレまで!)に、蜂の子みたいに楽器を持った子がつまって寸暇を惜しんでさらっている。リハーサルでそのレベルの高さに驚いたが、本番での堂々たるプロ意識はとても私と2歳位の差には思えない。本物にふれた感激と心に残るカロリーナとミヒャエルの素晴らしい演奏に、彼らと同じステージをふめた幸せをこれからも大切にしたいと思った。

マンハイム市立音楽院吹奏楽部の一行91名は去る8月29日(日)群馬県民会館大ホールで県立前橋商業高校の吹奏楽部と交歓演奏会を行ない、聴衆の熱烈な拍手を受けた。前橋商高では3年前からマンハイムへ招待され演奏会を開いて来たので、そのお返しに、一行を招聘したもので、前橋の他、守口(大阪)、高松、松山、広島等で演奏会を開き、日独親善交流を図ると言う。指揮者はフリッツェン氏、団長はバックハウス氏、通訳はフランクフルト独日協会員のシュレーダー・みえ子さん。(佐藤記)

中村事務局長の勇退

ぐんま日独協会創設の基盤となって、物心両面から大黒柱的存在であった、中村鉱一事務局長が、数年来健康を害され、一時は群大病院に入院加療、現在は自宅静養中でありますが、尚出務は差支えあり、更に代行執務をして頂いていた沢井修子様にも4月初旬、交通事故にて自宅療養リハビリに専念の止むなきに至りました。6月9日緊急役員会を開き、中村鉱一様へ代表がお伺し、創立以来長い間の御世話を頂きましたことを感謝し、今後共名誉会員となって、御高導を下されますよう御願い申し上げました処、写真の如く御元気で、快くご歓談委細承知してくださいました。

沢井さんは秋の初頃迄はリハビリに専念されることにて、取敢えず事務所所在地を別記に移転し、会務は差支えなく継続出来ました。之も中村様、沢井さんの整然たる会務執行の御蔭と厚く御礼を申上げます。新事務局長には鈴木克彬常任理事にお願いしました。

会長 平形義人(左)　事務局長 中村鉱一(右)

後　中村鉱一事務局長
左　角田勤副会長　右　佐藤進一
副会長　中　田所浪子常任理事

前大徳寺足立泰道の軸
右　平形義人会
左　豊泉伊三男副会長

役員会（於　登利平住吉町）
木暮沢子　対馬良一　佐藤進一　土屋喜代子　伊藤廉平
鈴木克彬　田所浪子　豊泉伊三男

駐日ドイツ大使　Frank Elbe ワルシャワの大使となる

駐日ドイツ連邦共和国Frank Elbe大使は2年前、印度大使よりEllen夫人を伴って東京に駐在され、貴公子然たる風姿と行き届いた御世話で尊敬され、豊橋の全国連合会や東京の公邸における石川一"津軽三味線の夕"で特に強い印象を残された。ドイツでは最も重要なポストの一つでもあるワルシャワに7／15お別れ会をして去られました。
ドイツ憲法史を講演して貰いたかったのに残念でした。

津軽三味線と私の出会い

館林市　対馬良一

7月13日、今年のドイツ大使の招待で開催されたガーデンパーティに平成10年度津軽三味線コンクール全国大会優勝者の北海道岩見沢西高等学校を今年3月卒業したばかりの石川はじめ少年の津軽三味線演奏が行われ、フランク・エルベ大使ご夫妻をはじめ全国からの240名の招待者に大きな感動を与えた。三本の弦から奏でられる迫力のある演奏に大使 は、「日本のすばらしい三味線音楽を聴くことができ、良い思い出となりました」と感想を述べておられた。近年、若い人の津軽三味線演奏者が全国に多くいる。

私が、津軽三味線に興味を持ったのは、夕張の炭坑の慰問にきた、津軽民謡歌手や高橋竹山師などを真近に見た時からである。宿泊先もない竹山師が友人の家に泊まり、そこで生の演奏を聴いたこともあった。今、全国に若い演奏家が沢山いるのは、東京オリンピックの前後多くの三味線演奏家の人々が青森から出稼ぎにきて、そのままその地に住み着き、弟子を育て流派を興しその弟子たちが全国で活躍している。本場、青森県より若い演奏家が多い。津軽三味線研究家の大篠和男氏(弘前市在住)は津軽三味線の定義として「太棹の三味線で曲弾を即興で弾くこと」であると語る。太棹の三味線を打楽器のように激しく、叩き撥、豪快華麗な合奏の迫力は他の三味線音楽にみられない。

津軽三味線にはこれといった正調がない。したがって弾き手が自由に伸びのびとアドリブで弾く事が出来る。つまり、黒人音楽から生まれたジャズと同じ原理である。

津軽三味線は、つい近年まで、乞食芸、大道芸で、ボサマ（坊様）と呼ばれる男盲の門付け芸人が奏でる三味線音楽で、津軽三味線と言う呼称でなく、ボサマ(坊様)三味線と呼ばれ、津軽では、ホイド、すなわち乞食とも呼ばれていた芸であった。

現在の津軽三味線には「叩き三味線」と「弾き三味線」の系統がある。叩き三味線は、弦楽器を打楽器に変えたように激しく叩きつける奏法、これに対し「弾き三味線」は対象的に、物静かに、うら悲しい撥音で、三の弦を多用してしんみりとした音澄みを聴かせる奏法である。「叩き」の、木田林松栄、白川軍八郎、「弾き」の、高橋竹山と言われている。私は、毎年5月青森に津軽三味線全国大会を聴きに行く。それと、かつて高橋竹山師と全国を巡業して歩いた、弘前在住の盲目の従姉妹から昔の苦労話を聞くのも楽しみです従姉妹は津軽三味線の舞台や練習の時に自分が師匠に教えられた言葉があるという。

「人真似だば猿でもできね人真似でねエ、な(汝)の三味線ばふげ(弾け)」という。

先日の大使館で弾いた石川はじめ君は高校時代から毎日5時間以上の練習をしていた。

それが17歳という若さで日本一に輝いた努力の結晶である。

今年11月26・27日、東京ドームで行われる、津軽三味線フェステバルに出演し、その後、沼田、月夜野方面を皮切りに群馬、栃木県各地を12月5日まで演奏をする。

今年のぐんま日独協会のクリスマス会に、特別、石川はじめ君の演奏を予定しました。是非、多くの人達に彼の素晴らしい生の演奏を聴いていただきたい。

どの様な演奏をするか今から楽しみである。

※(石川はじめ君は私の北海道の従姉妹の三人兄弟の末っ子です)